

ギユンター・アイヒ作

二人のオマール

新津 嗣郎
竹中 克英
共訳

声… カリフのオマール／大臣／奴隸／三人の太守／ポーター
のオマール／シャムサ（その妻）／六人の子どもたち／
ジャファル（ポーター）／船長／船員／商人／庭番女

（この放送劇の音楽は、主題的に扱い、二つの単純なモチーフからなるものとする、すなわち、モチーフ一はカリフに、モチーフ二はポーターに割り当てる。両者はそれぞれ金管楽器または弦楽器一つで演奏され、しかも次のように交代する。まずカリフのモチーフは、第一場の前奏、第一場の個々の文の間、さらに、第三と五場の前奏はさらに大きな音で金管楽器によって演奏するものとする。それから、第二場の前奏と第十三場の前奏は、小さく控えめに弦楽器によって。ポーターのモチーフは第二場の前奏と第二場の個々の文の間、および第四場と第六

場の前奏で控えめに小さく弦楽器で演奏する。第八、一〇、十一場の前奏は、しかし、金管楽器に移行する。第七場の前奏で二つのモチーフは合一し溶け合う。第九場も同様であるが、第七場の前奏とは違って、ここでは幾分遠く不確かな響きが加わる。第十三場の後には、終曲として、自由な多くの楽器編成による二つの主題のパラフレーズを続けてもよい。）

—

カリフ 自己紹介をさせていただく。わたしの名前はオマール、バグダッドのカリフである。歳は三〇、いたって健康である。いくつかの城と庭園、それに宝石の詰まった宝物庫を所有している。わたしには傭兵、奴隸、それ

毎日一人あたりとして三六五人の妻がいる。ところが、わたしは少々調子の悪いところがあつて、そのためなら、喜んで城も庭園も宝物庫も手放し、傭兵、奴隸、女奴隷たちも解放するし、三六五人の妻たちとだつて別れるつもりだ。つまり、わたしは夜が恐ろしいのだ、それとというのも、悪しき眠りと苦しい夢のせいである。

二

ポーター おれも自己紹介させてもらうとしよう。おれの名前もオマール、同じく三〇才で、健康状態も申し分なし。だが、バグダッドのカリフと共通なのはそこまでだ。おれには城もなければ庭園もない、バグダッドから遙か離れた中国の海岸にあるハナド港のポーターだ。おれは、惨めなどと言わないまでも慎ましい家に住んでいる、家に入る時には深く身を屈めなければならぬが、それはおれが高貴な人間だからではない。おれには奴隸も傭兵もない、妻は一人きりで、妻との間に六人の子どもがいる。港での報酬はわずかなもので、おれたちの生活は実に貧しい。だが、ひとつの点でおれは満足している。つまりよく眠れるし、夢見もすばらしい。

三

(カリフの部屋。軽い鼾の様子から、彼がすぐにも目を覚まそうとしていることが分かる。鼾の合間にうめき声を上げ、意味不明の言葉をつぶやく。突然鼾が止み、一瞬の静寂。君主は心を落ち着ける。)

カリフ 大臣！

(一息おいて、前より大きな声で) 大臣！(彼の声は次第に堂々とした怒鳴り声になる。) 大臣！ 大臣！ 大臣！(呼び鈴の紐をつかみ、性急に鈴を鳴らし始める。その音と怒鳴り声とでひどい騒ぎとなる。奴隸が転がり込んでくる。)

奴隸 陛下！

カリフ おまえは何者だ？ 何の用だ？

奴隸 御前の床に口づけいたします、崇高なるカリフ様。あなたの奴隸でございます。

カリフ お前の頭を足許に転がしてもらいたいのか？ わたしが誰を呼んだか聞こえなかったか？

奴隸 承りましたとも、崇高なるカリフ様、急いで大臣を呼んでまいります。

(奴隸は駆け出していく)

カリフ 役立たずのならず者め！(うめき声をあげる) おお――

ああ——おお——ええ——いい——

大臣 (部屋に入ってくる) 崇高なるカリフ様！

カリフ 大臣か！

大臣 陛下の御前の床に口づけいたします。

カリフ 馬鹿はよせ、大臣！ ここへ来てベットの端にかけろ！

大臣 かしこまりました。

カリフ 大臣、わたしはバグダッドのカリフなのか？

大臣 何というご質問を！

カリフ ということは、そうなのだな。大臣、わたしには城や

庭園や金銀宝石の詰まった宝物庫がなかったか？ 大

臣、傭兵や奴隷を抱えていなかったか？ 大臣、毎日一

人あてで三六五人の妻を持っていなかったか？

大臣 すべてお持ちでございます、陛下。

カリフ みなはわたしの命令に従うか、大臣？

大臣 従います。

カリフ で、もしわたしが小指で合図すれば、大臣？

大臣 そのときは首が飛びます。

カリフ つまり、何事もすべて——

大臣 陛下の御意のままでございます、カリフ様。

カリフ それならばなぜ、大臣、わたしは夜ごと胡椒袋を運ば

ねばならぬのだ？

大臣 胡椒袋ですって？

カリフ それに、ナツメヤシの籠もだ？

大臣 籠？ ナツメヤシのでございますか？

カリフ 煉瓦もな？ 煉瓦が一番つらい。

大臣 煉瓦ですと——崇高なるカリフ様、いったいどこで煉瓦を運ばれるのですか？

カリフ 港だ。船から陸へ、陸から船へだ。その上監督どもが

大声で叫び、叩きに来ることもある、短い鞭でな。

大臣 ああ、すべての時代でもっとも偉大であられる王様、荷を運ぶためには奴隷がいます。カリフが運ぶものはなにもございません。

カリフ (物思いにふけり、いささか誇りを持って) 今日には煉瓦だった。九十九個の荷物を運んだ。一〇〇個目のところに行こうとして、わたしは渡板から足を滑らせ、水に落ちた——そこで目が覚めたのだ。

大臣 いまご自身がおおせられたように、カリフ様、夢をご覧になったのです。

カリフ 今夜の稼ぎは三ディレームだ。さあ見るがいい、金は枕の下にしまつてある。全部でもう五十七ディレームになる。

大臣 どうかお許しを、ああ王様、あなたの僕のうちでもっとも卑しい者でありますわたくしでさえ、笑わずにはおられません。はっはっは！ あなたの宝物庫にはその千倍、万倍、十万倍もありますのに。

カリフ 確かにそうだ、だが、ともかく枕の下にも少しはあるのだ。

大臣 どうしてそんなことに？ あれほどたくさんの宝物をお持ちなのですよ、カリフ、——なぜ枕の下にまで置いておかれるのです？

カリフ どうやら、大臣、おまえはわたしの言葉を疑っているようだな？

大臣 あなたの夢をお疑いなどしておりません、カリフ。失礼ながら、ご忠告申し上げますが、王室顧問会議がお待ちしております。

カリフ 王室顧問会議だと——ああ！ わたしは眠くて、もうたたくた。

大臣 十六件もの法律事件があなたのご賢明な判決を待っております。——

カリフ わたしには何も思いつかぬ。出るのはあくびだけだ。おまえも一度一晩中レンガを引きずって歩いてみるがよい！ ただわたしが知りたいのは、あれがどの港かということだ。バグダッドなどではない。チグリス川には

走っていないほどの大きな船だ。海沿いの港だ。豪華な屋敷、豪華な船があった——

大臣 (性急に) おお、信仰あつき人々の支配者であられるカリフのオマール様、あなたの騎士たちが王宮広間でお待ちです。夢のことはお忘れください——

カリフ アラーにかけて、おまえはわたしの怒りを掻き立てる、大臣！ 夢などという言葉をおまえの口から二度と聞きたくない。わたしの手の肉刺まめが夢だというのか？ それにここにできているのも？

大臣 おお、高貴なるお方、わたしのような者の目の前で肩を出されるとは、勿体ないことでございます。

カリフ よく見ろ、愚か者め！

大臣 おお、ご主人様、青痣や茶色の痣だらけです、お肌に皮下溢血ができ、赤剥けております、——みみず腫れにかさぶたが——ご主人様、侍医をお呼びいたしましょう——

カリフ そんなことはどのみち自分でやる、おまえの助けなどいらぬ。だが、おまえに尋ねるが、これが夢か？

大臣 いいえ、とお答えしたいところですが。

カリフ ならば、そう申せ！

大臣 おお、ご主人様、驚きです、王宮広間でお待ちの騎士の方々のことを思いますと、なおさら。

カリフ 大臣、お前にはうんざりだ。

大臣 高貴なるお方、うんざりされるのが大臣というものの使命でございます。

カリフ それで、わたしは良く考えてみた、大臣、なぜ港のポーターどもはあのように苦労しているのか、とな。そこでおまえに命ずる、わたしの肩に当てる肩当てを作らせるのだ。想像するに、革かなにか、例えばとても柔ら

かなガゼルの革が良いだろう。袋状のものだ、よいか、寸法どうりに、中に柔らかな布地を詰めたものだ。これは自分で思いついたのだが、大臣、われながら悪くないと思っている。

大臣 カリフのオマール様、すべてご命令通りいたします。ですが、ご忠告申し上げねばなりません——

カリフ 王宮広間と法律事件のことだろ、わかっている。いたいわたしに何を期待しているのだ！ 判決か！ まるでわたしがソロモン王その人みたいではないか。わたしはただのオマールにすぎぬ、カリフにしてポーターだ、裁判などには何の才能もない。

四

(ポーターのあばら屋。彼は眠っている、カリフ同様、変化に富んだ軒をかいている。目覚める直前である。彼の子供たちがその周囲にうずくまって、眠っている彼を見守っている。彼の呼吸と表情の微妙なニュアンスを視聴者にも出来る限りわかるように、子供たちのコメントがそれに対して加えられる。)

子供1 父さんが起きないように、静かに！

子供2 夢を見ているのよ。

子供1 ぼくは何の夢か知ってるよ。いま階段を上がって王座

につくところだ。腰を下ろした。

子供3 父さんが何を考えているか分かるか？ 額にしわが寄ったよ。

子供4 難しい事件なんだ。

子供5 父さんの話が聞きたくてたまらないよ。

子供6 兄さんたちは、父さんがもう裁判をしているところだと本当に思う？

子供1 大臣が状況報告をしているところだ、多分。

子供2 ほら、お父さんに何か閃いたんだわ。

子供3 なんて満足そうに微笑んでいるんだろう！

子供4 何か名案が閃いたんだよ。

子供5 ソロモンの裁きだね。

子供6 だって最高に賢い人なんだもの、ぼくらの父さんは！
(ポーターのオマールが目を覚ます。正気に返ってあたりを見回す。)

ポーター おお——ああ——おお——

子供1 話してよ、父さん。

ポーター 何だって？

子供2 どこにいたの？

子供3 王宮の広間だよ、そんなことわかっているじゃないか。

子供4 でも、どんな判決かぼくらは知らないよ。

子供5 もし判決があったのなら。

子供6 話して、父さん！

ポーター (嬉しそうに) いつものように、わしはカリフだった。

子供1 もちろんだよ、父さん、父さんはいつだってカリフだよ。

子供2 きつと本当にカリフなんだわ。

ポーター そうとも、わしはほんとにカリフさ。

子供3 今日は何か変わったことでもあったの？

ポーター 実に難しい事件だった。ああ、子供たち、おまえたちの父さんは賢いんだぞ。少なくとも、カリフとしてはな。ポーターとしちゃそれほどでもないんだが。

子供4 話してよ、父さん！

ポーター わしがちょうど判決を言い渡した時だ、玉座が崩れ落ちて、それで目が覚めた。

子供5 玉座が崩れ落ちたって？

ポーター 大臣のやつめ、きつとそのうちひどい目にあわせてやる！

子供6 そうだよ、父さん。カリフ様に虫の食った玉座を用意するなんて許せない。

子供1 ところで、いったいどんな判決だったの？

ポーター 三人の商人がわしの前に現れて、一人の女を告訴したんだ。事の次第はこうだ。

四人の商人がいた、彼らはあわせて千ディナール持っ

ていた。それは彼らの共有の財産で、その金を一つの袋にまとめて入れて、商品を仕入れるために旅をしていたのさ。さて、旅の途中にある美しい庭園にやってきた、中に入ると、庭園の庭番女に、袋を預かってくれと言って預けた。それから彼らは庭園を歩きまわり、飲み食いしながら楽しんだ。そのとき、彼らの一人が「わしはクリームを持ってきている。さあ、この冷たい泉で頭でも洗って、軟膏を塗ろう」と言った。するともう一人が、「だったら櫛が要る！だが、わしらは誰も櫛など持つておらん」と言った。そこで三人目が、「あの庭番女に聞いてみよう、もしかしたらあの女が持っているかもしれない」と言った。そこで四人目の男が庭番女のところへ行って、彼女に言った、——何て言ったと思う？

子供2 「櫛を貸しておくれ！」って言ったんでしよう。

ポーター そうじゃない、彼はこう言ったんだ、「袋をくれ！」

子供3 お金の入った袋のこと？

ポーター そうだ、金の入った袋のことだ。

子供4 それで、彼女は袋を渡したの？

ポーター いや、彼女はこう言ったのさ、「あなたお一人ではこの袋をお渡することはできません。四人ご一緒にいらしてください。」すると、その商人は「連れの者たちがわしに袋を取ってくるように頼んだんだよ」と言った。しかし、庭番女は一向に袋を渡そうとしない。と、そこへ

ほかの三人が近くにやって来た、庭番女には彼らの姿が見え、話し声も聞えた。そのとき、四人目の商人が連れに向って大声で「彼女はどうしても渡してくれんのだ」と言った。

子供5 ああ、そうか――

子供6 そうかつて、何？

子供5 彼らは当然櫛のことだと思っただ。

ポーター いいぞ、賢い奴だ。お前を皇太子にしてやろう！

彼らは櫛のことだと思っただから、庭番女に大声で「なぜ渡してやらないんだ？」と言っただのさ。庭番女は庭番女で、彼らの言っているのは袋のことだと思っただわけだ、だからそれを四番目の商人に渡してしまっただ。男は袋を受け取ると、急いでトンズラしちまっただ。

子供1 それで、ほかの人たちは？

ポーター しばらくして彼らは、男がなかなか帰ってこないのに気づいて、庭番女のところへ行つて、「どうしてあいつに櫛を貸してくれないんだ？」と尋ねた。すると彼女が言うには、「櫛のことなんか知りませんよ。あの人が言ったのは袋のことです。」それで連中は庭番女を捕まえ、わしの前へ引っ立ててきて、彼女に千ディナールのはいった袋を要求した。

子供2 それで？

ポーター そう、それでどうなったか？ おまえたちはどう思

う？

子供3 庭番女は千ディナール払わなくちゃいけないさ。

子供4 かわいそうに！ 彼女はそんなことできないよ。

子供6 で、何て言っただの、お父さんは？

ポーター まあ聞け、子供たち、わしはソロモン王だつてこれ以上は無理だというような判決を見つけたんだ。もつとも、長いこと思案しなけりやならなかつただけだな。

子供1 話してよ、父さん！

ポーター わしはまず庭番女に尋ねた、「四人がそろつた場合にのみ袋を返す、という取り決めだったのか？」「はい」と彼女は言っただ。それから三人の商人にも同じことを尋ねると、彼らの答えも「はい」だつた。そこでわしは三人の商人にこう言っただ、「その連れの男をここに連れてまいれ、そうすればおまえたちにこの庭番女は袋を返してくれるだろう。」で、これがわしの判決だ。

子供2 ああ、父さん、父さんほど優れたカリフは一人も居ないわ。

ポーター わし自身も、我ながら悪くない判決を見つけたものだ、と言いたいところだ。

子供3 父さんはカリフのなかで一番立派なカリフだよ。

子供4 それに、一番立派な父親だよ。

(下アが開く)

子供5 母さんだ！

シヤムサ どういうことなのさ、これは、オマール！ あたし

ばつかり子供たちのために苦勞しなくちゃならないのかい？ あんたは熊の毛皮に寝転がって、カリフを演じ、あたしはといえば、気まぐれで高慢ちきな貴婦人方のために洗濯物を洗つてゐるっていうのに！ 港にはもう運ぶものはないのかい？

子供6 父さんはソロモン王みたいに判決を言い渡したんだよ。

ポーター お黙り、母さんの言う通りだ！ カリフの威光はあまねし。いまは荷物を運べつていうことなんだよ、船から岸へ、岸から船へ

五

(カリフの寢室。支配者オマールが枕の下に隠していた金を数えている。大臣は心配そうに見守っている。主人の道楽が彼には理解できない。)

カリフ 百七、百八——今までに百八ディナール稼いだわけだ。

考えても見ろ、大臣、昨晚だけで五ディナールだ、わたしがどれほど進歩したか分かるだろう。肩当てが役に立つことが証明されたのだ。いまでははじめのころの三倍は稼げる。ほかの連中がこういう肩当てをどうして持つ

ていないのか分からない。お前には分かるか？

大臣 (激怒して) いいえ、わたしにも分かりません。

カリフ ポーターの地位全体を根本的に改革しなければならぬ。(物思いに沈んで) わたしにはその力があるように感じられる。

大臣 (内に押さえた怒りのために、彼の声は震えている) カリフ様、高貴なる支配者にして王のなかの王であられるあなた様、御前の床に口づけして、このもつとも惨めな奴隷の申し上げる、もつとも遜^{へりくだ}つた申しごとをお許しください、あなたの臣下である騎士の方々があなた様のことで不平不満を申し上げます、いやそれどころか、臣民すべてが不満を唱えております。

カリフ 何？ 不平を申していると、不満だというか？

大臣 さようでございます、カリフ様。

カリフ そのようなことが彼らに許されるのか？

大臣 (これほどの世間知らずに嘆息して) もちろん許されません。彼らはあなた様に謀反を企てることも許されず、あなた様を捕らえることも、あなた様の首を切り落とすことも許されません。

カリフ (満足して) そら見ろ！ つまりは何も起こるはずがないということだ。(突然大臣の言葉を奇妙に感じて) つまり——一体お前はどのような意味でそのようなことを？

大臣 カリフ様、公務にいつその関心を向けられますよう、

切にお願いいたします！

カリフ わたしはできる限りの関心を公務に向けておる、だが、残念ながらわたしに備わる才能の限りでな。

大臣 (本心を押し隠して) 才能のせいだとおっしゃいますか？

カリフ それに、一晚中重い荷物を運ばなければならず、朝には疲れ切っている、となれば、政務は当然きつい。

大臣 それを変えなければなりません、カリフ様。

カリフ 変えることにはわたしも賛成だ。例えばだ、わたしは小型の荷車を考えついた、わかるか、ほんの軽い荷車だ。

大臣 荷車？

カリフ 荷物を担ぐよりも車で押したほうがずっと少ない力ですむではないか。

大臣 (腹を立てて) 荷車に乗せられ、皮剥ぎ場に運ばれることのないようにご注意くださいませ、カリフ様！

カリフ 何と無礼な言い草だ？

大臣 あれがお耳に入りませぬか、カリフ様？

(外で騎士たちや民衆の威嚇的な不平不満の声が高まる)

カリフ あれは何だ？

大臣 暴動です、カリフ様。

カリフ 彼らはもはやわたしなど望まぬというのか？

大臣 さようでございます。

カリフ わたしもはや彼らなど望まぬ。

大臣 王様、最後のチャンスを逃しませぬよう。

カリフ 最初のだ、大臣、最初のチャンスだ！ 外へ行って、

わたしが退位したと言え！

大臣 しかし、しかし、いったいどなたがこれから——？

カリフ 新しい支配者が見つかるまで、おまえが政務を引き受けよ。わたしが自分で何とかいたす。新しいカリフを探してみよう。誰か見つければ、その者にわたしの印章指

輪を渡し、彼をここへ差し向けてやる。

大臣 カリフ様、なにかもこのように突然に……

カリフ ああ、それも暴動がこのように突然始まったからにすぎぬ。

大臣 すでにずっと以前からその空気がみなぎっていました。

カリフ わたしもそうだ。さあ、まいれ、わたしの言った通りにするのだ、支配者としてのわたしの最後の怒りを我が身に招かぬようにな！

大臣 御意のままにいたします、崇高なるカリフ様。

カリフ カリフだったのだ。

大臣 わたくしには、いつまでもカリフ様です。

カリフ 礼を言うぞ。しかし、ともかくまいれ！ どうやら外の雰囲気はこの数分で悪化したようだ。すくなくとも騒ぎが一層大きくなった。カリフとしてのこのわたしの耳には少々こたえる。

(大臣は何度かお辞儀をしながら、退出するが、次第に聞こえなくなる)

カリフ 飛び跳ねるようにして行くわ、この国の道化者めが、

これでわたしは自由の身だ、自由だ、自由なのだ！ 百
八ディナールもあれば、世界の果てまで行くにも十分
だ。ついにわたしの壮大な計画を実現することができ
る！ あの港を探そう、わたしの心が求めて止まぬあの
港を。ポーターの組合を設立するぞ、ポーターという仕
事全体がもつと高い地位を得なくてはならない。それか
ら荷車だ、忘れるな、荷車だ！ わたしにはさらにさま
ざまな計画がある——（彼の未来についての戯言が妨げ
られる）——いったいまたどうしたというのだ？？（それ
というのも、大臣が興奮して入ってきたからである）

大臣 高貴なるカリフ様、終わりました——（息を切らしてい
る）
カリフ わたしの首を刎ねるといふのか？

大臣 反対でございます。

カリフ 首を刎ねるの反対とは、いったいどういうことだ？

大臣 崇高なる王様、世論は、あなたの退位宣言後に完全に逆
転いたしました。彼らはあなたを求めて叫んでいるので
す。彼らはあなたをおいてほかにいないと言っているの
です。

カリフ 恐ろしいことだ！

大臣 三六五人のあなたの奥方たちが恐ろしい形相をして向か
つてこられれば、誰も敢えてあなたに反対など言うもの

はいませんでした。

カリフ わたしの計画はどうなるのだ！ わたしの未来は！
偉大なるアラーよ！ わたしにはその資格があったので
は！

大臣 偉大なる勝利です、尊敬するカリフ様。

カリフ しかも一滴の血も流さずにな。

大臣 言うなれば、御人徳の勝利というところです。

カリフ かもしれないぬ。（何か含むところがあるかのよう）大
臣、すこし一人にさせてくれないか？

大臣 王様、国民にお姿をお見せ下さるのがよろしいかと。

カリフ いまは事の顛末を良く考えねばならぬ。誰にも邪魔を
させてはならぬぞ。

大臣 御意のままにいたします、おお、限りなく崇高なるカリ
フ様。

（出てゆく、前と同様に丁寧なお辞儀。

オマールは、ディナール貨と肩当てを荷造りして、誰もい
ないか窓から外を見る）

カリフ 三六五人の女どものことは計算外だった。しかも、最
近王室顧問会議では、閏年用にわたしにも一人当然い
てよいのでは、などという質問さえ出たという。幸いに
して、ほとんどの女どもは顔も見ることがない。何を押
しつけられるか分かったものではない。スルタンなど哀
れなものだ、家臣どもが自分で養えぬ娘たちをハーレム

に引き受けてやる義務があるのだからな……さあ、こんなことはもう終わりだ！ こういうばかげたことにつき合つてくれる人間をほかに探すことだな！ こんな風にとつそり窓から自分の宮殿を立ち去らなければならぬとは、もちろん思つてもいなかった。さあ、出発だ、オマールよ、ためらうな、——おまえの行く手には自由が開けている。

（窓から外に出る。荒々しい、リズムカルなコーラスとなつて湧き上がる「オ——マール——オ——マール——オ——マール」という歓呼の声がなおしばらく続く。）

六

（外海の風）

船長 船長、船長！

船長 大声でどうした？

船員 おれが叫んでいるんじゃないやねえ。黍^キだよ。

船長 何だつて言うんだ、馬鹿野郎？

船員 黍がうめいてるんだ、黍が鳴いてるんだ、黍が叫んでるんだ、「おお、おお」つて！——こいつはどういう黍だね、船長？

船長 中国のだ、二百袋ある。

船員 アラーが黍に言葉を授けたにちげえねえ。それとも、船長、悪魔がなかに居座つてゐるんだ。

船長 とすると——

船員 何でえ、船長？

船長 船倉の中だ、ほかにあるか？ 来い！

船員 俺が舵取りを引きうけようか、その間？

船長 いらぬことだ、臆病者め。

船員 きつと俺の思い違ひだつたんだ、船長。風は時々そんな風にほえるもんだ。

船長 口答えするな！

（船倉に下りてゆく。風の音はもう聞こえない）

ポーター おお、おお！

船員 聞こえたか、船長？

船長 アラーのほかに神なし。船倉に居るのは何者だ？

ポーター ああ、ああ！

船長 出て来い、光の当たるところへ！

ポーター 地面が揺れている。おお、おお、ここは何処だ？

船長 先ずはだ、何者なんだおまえは？ つねにきちんと順序よく答える。まず最初はわしの番だ。

ポーター おれはポーターのオマールだ。そんなことは誰だつて知つてると思つていたが。

船長 で、おれたちは海の上にいる。地面が揺れてるところといえは海だ。そんなことぐらい誰でも知つてると思つて

たがな。

ポーター ああ、おれはどうやって海の上にやってきたんだ？

船長 いつも通りき、船に乗ってな。こいつは「タイフーン」ていう帆船だ。

ポーター ああ、おれはどうやって「タイフーン」なんて帆船に乗ったんだ？

船員 (彼の真似をして) おお、おお！、いまおれたちも同じことを尋ねてるのさ。

ポーター だんだんわかってきたぞ。

船長 だんだん、だと？ おまえの記憶が戻ってくるのにつき合っている暇なんかないんだよ。

ポーター 肩から袋を下ろしたとき、おれも一緒に船倉に落ちたんだ。きつと頭から落ちたに違いない。

船長 きつとおまえの言うとおりだ。

ポーター おれは今まで気絶していたんだ。ハナドからはもうずいぶん来たのか？

船長 三日走ったところだ。

ポーター 三日も気絶していたのか！

船員 それで、ほかに思い出すことは。

ポーター すぐ引き返そう、船長！

船長 ハナドへか？

ポーター おれには家内と六人の子供がいる。

船長 おれにだって妻が二人と子供が九人いる。ごめんだね、

引き返すなんて。

ポーター おお、おお！

船員 次の港はバスラだ。

ポーター バスラ？ 何処にあるんだ？

船長 風向きが良ければもう二十七日の航海だ。

ポーター おお、おお、おお！

船長 バスラまでの船賃は六〇ディナールだ。

ポーター おれはバスラなんかへ行かないぞ。

船長 だが、そうするしかあるまい。船倉ならもつと安い。五

〇でどうだ。

ポーター 一ディナールだつて持つちやいない。

船長 おお、おお、おお！

七

(港で)

カリフ レンガを運ぶよ、旦那、ナツメヤシ、油、粉、黍はど

う？ ずいぶん安くしておきますよ、旦那。

ポーター おれの着てるのはぼろだ、わからないのか、馬鹿野

郎？

カリフ 旦那、擦り切れたぼろ服なんかにごまかされないよ。

わたしには見る目がある、あんたは金持ちだ。

ポーター おれには賢いかどうか見る目がある。おまえは馬鹿だ。

カリフ 旦那、あんたが金持ちでないとしても、明日か、明後日か、一週間後にはきつとそうなる。

ポーター (激怒して) 明日にしか手にはいらぬレンガを今日運ばせろだと? それにナツメヤシだと! 一個でも持つていけば、とつくに食つちまつてるさ。

カリフ おお、一個ならあるとも。

ポーター よこしな! (噛みながら) 以下の場面においてしばしばそうする、そのために、彼が非常に興奮してしゃべるときにも、言葉に超然とした無関心さが加わる) ここに座っていいぞ。

カリフ ひどい場所だ。日陰もない。

ポーター しかし、海が見える。船が来るのが見える。もう一個ナツメヤシはあるか?

カリフ ああ。

ポーター ありがとうよ。本当は船など一艘だつて来やしな

カリフ 本当だな、旦那。

ポーター いちいち旦那なんて呼ぶな、気分が悪くなる。おまえは何者だつて? ポーターだと。おれもだよ。

カリフ (うれしそうに興奮して) あんたも?

ポーター そこに持つている台は何だ?

カリフ 自分で発明したものだ。荷物を運ぶ小型の荷車だよ。ポーター それに、肩の上のは?

カリフ 荷物が痛くないように肩当てだよ。これだとずいぶんたくさん荷える。

ポーター 最初見たほど馬鹿じゃなさそうだな。

カリフ まずいことに、ここはポーターが多すぎて荷物が少なすぎる。

ポーター (ため息) ハナドに居れば良かった。

カリフ どこだつて?

ポーター もうナツメヤシは持つてないのか、どうなんだ?

カリフ あるとも。

ポーター おれは船倉に落ちたんだ、わかるか! で、気がついてみると、外海だった。バスラなんかでおれは何をしただらいいんだ? ハナドにいる六人の子供たちと女房はどうしているかなあ?

カリフ 女房ひとりに子供が六人か、きつとすばらしいだろうな。

ポーター 惜しいやつだ! 頭がそれほど弱くなけりや、才能のある人間だろうに。

この肩当てにしても、荷車にしても——なあ、おれにそいつをもしかして——?

カリフ だめだめ。

ポーター おれも馬鹿じゃないが、そんなの思いつかなかつ

た。

カリフ それどころか、あんたは頭がいい、すぐに気がついたよ。

ポーター 実はな、ハナドではおれは頭がいいから、カリフって呼ばれてたんだ。

カリフ カ、カリフだって？

ポーター 女房や子供たち、それに港の仲間たちもみんなが

れのことを――

カリフ カリフと呼んでた――

ポーター そうとも、カリフのオマールってな。

カリフ オマール、カリフのだと？

ポーター それがおまえに何か？

カリフ もうひとつナツメヤシはどうだ？

ポーター よこしな！

カリフ バグダッドではわたしもカリフのオマールと呼ばれていた。

ポーター お前が？（笑いながら）どうして？

カリフ わからん。きつとわたしをからかうためだろう。

ポーター はは、こいつは面白いや。

カリフ ずいぶんね。ところで、あんたは次の船を待つのかね？

ポーター ただで乗せてくれると思うか？ 船長は五〇ディ

ナールもよこせて言うんだ。

カリフ バグダッドならもつと安い。

ポーター また自分が賢くないってことを示すようなことを言う。おれはハナドへ行きたいんだ、バグダッドへ旅する

ほうが安いからって、なんの役に立つんだ？

カリフ かかったのは七ディナール、それにわずか五日だ。

ポーター おれを怒らせるつもりか。気を静めるから、もう一

個ナツメヤシをよこしな。

カリフ ああ、気を静めるのだな。大いなる決断の前には、完全に冷静でなければならぬ。

ポーター おれたちはどうもじっくりいかないな。でなきゃ、

おまえのようなやつを我慢するには、ナツメヤシがまるまる一袋なくちゃならない。

カリフ そうとも。さあ食べるがいいよ！

ポーター おれが大いなる決断などする必要はないさ。決断の

ほうがおれに会いにくらあ。

カリフ いいか、五日だよ。もしもだ、たとえば船が一ヶ月来

なければ――

ポーター どういう船だ？

カリフ あんたがハナドへ行こうって言うてる船のことだ――そ

れが一月後にしか出ないとすると――

ポーター で、もし明日にも見つかったら？

カリフ そのときは別のがある。

ポーター ナツメヤシだ！ たくさんぞぞ！

カリフ 行きに五日、帰りに五日として、バグダッドを見物するのにまだ二〇日もある。なあ、ハナドなぞにバグダッドに來た者がいるか？ あんたにはチャンスじゃないか、それをみすみす無駄にしようって言うのか？

ポーター チャンスだと？ おれには一ディナールもなく、おまえのナツメヤシで生き延びてるんだぞ、つまり、もとはと言えばお前に対する怒りで生きてるっていうことだ。そんなチャンスがどこにある？

カリフ ここにある！（チャリンと貨幣を手の中で鳴らす。）

ポーター 何のまねだ？

カリフ 十四ディナールある。バグダッドへの旅費だ。

ポーター それで、一ヶ月の方はどこにあるんだ？

カリフ そいつはあんたが何とかしなくちゃならない。

ポーター おまえはおれに一財産あるようなことを言うが、そんなものはナツメヤシがなければ耐えられないものだ。

カリフ さあ、これを。

ポーター で、女房のシャムサはどうなる？ タリブ、ヌスラ、

サブル、ミルダス、ヒンド、それにチャトウンは、おれの

子供たちは？

カリフ （嬉しくてたまらず、名前を記憶に刻みつけるように）

シャムサ、タリブ、ヌスラ、サブル、ミルダス、ヒンド、

そしてチャトウンか！

ポーター 作り話じゃないぞ、おれの家族だ。

カリフ シャムサか！ おい、カリフのオマール、一つ提案がある。わたしがその間ハナドへ行行って、腹を空かせた子供たちを食わせてやろう。（表現豊かに）タリブ、ヌスラ、サブル、ミルダス、ヒンドとチャトウンだな！

ポーター お前がハナドへ？ で、おれは？

カリフ バグダッドへ行くのだ。

ポーター ハナドへは行くだけでも一ヶ月はかかるぞ。

カリフ だったらあんたもバグダッドにもう少し長く滞在するんだ。きつとそうなるさ。三六五人の女たちがあんたを待っている。毎日一人ずつだ。それだけでもう一年だ！

ポーター （口の中につばがたまる）悪くない！（思案しながら、激しく怒って）おまえは恐ろしいほどの馬鹿野郎だ、

まったくもってひどい馬鹿野郎だよ！

カリフ 肝心なのはやってみるってことだ。もしうまく行かなかつたら、あんたは十日後に戻ってこられる。十日ぐら

いなんともないだろう！ いずれにしても十日ぐら

れにかけてみてもいいだろう。

ポーター それで、おまえは？

カリフ ハナドへ行く。シャムサの所へ！

ポーター やめろ！

カリフ タリブ、ヌスラ、サブル――

ポーター （あえぎながら）ナツメヤシだ！

カリフ もうナツメヤシは終わりだ！ 食べるのも話すのも止

（31）

めて、すぐ出発だ、怒りの発作もなしにして、その代わりにすぐバグダッドへだ！ あんたの指輪を渡せ！

ポーター おれの指輪？

カリフ その代わりわたしのをやろう。

ポーター おまえの指輪のほうがはるかに美しいと言わざるをえん。

カリフ もしあんたが心配になったら、そいつを見せて、ありのままに、おれはカリフのオマールだ、と言えばいい。

ポーター おまえもハナドでそう言っているぞ、ハハハ！

カリフ バグダッドに着いたら、まっすぐ城へ行って大臣を呼べ！

ポーター もちろんだとも、まっすぐに城へな、ほかにどこへ行けばいいんだ！ おまえもハナドに着いたらすぐにカリフのオマールの城を訊ねなよ、シャムサがお前を騙せるようにな。

カリフ ミルダス、ヒンド、それからチャトウン。

ポーター ひとつだけ気がかりがある、おまえに腹が立った時のためにだ、バグダッドにはたつぷりナツメヤシがあるのか？

カリフ つまり、バグダッドへ行くってことだな？

ポーター おれの質問に答える、重要なことだ。

カリフ ナツメヤシならいくらでももらえる。

ポーター 忌々しい馬鹿野郎だぜ、だが、どうやらおれはほん

とにバクダッドへ行くような気がする。

カリフ (大喜びで) シャムサ！

八

(城で)

奴隸 大臣！ 大臣！

大臣 どうした？ わたしを馬みたいに呼ぶとは、作法に合っているか？

奴隸 大臣、作法がどうのといつてるときじゃねえ。謁見の間にルンペン野郎がいるんだ。豪華なマントをよこせて、わめいているんだ。それに、王室顧問会議がまだ招集されてないではないか、などと興奮してます。やつは俺に靴を投げつけやがって。

大臣 謁見の間だと？ 靴を投げつけた？ 奴隸、何をとぼけたことを言っている。

奴隸 それに、あんたを呼べって、大臣、やつはわめいています。たった一人で玉座に座ってます。だが、二〇人分もわめいてます。

(謁見の間)

ポーター この無秩序は何としたことだ！ 大臣！ 大臣！

(大臣と奴隸が謁見の間の扉の前で)

奴隸 やつの声が聞こえるでしょ、大臣！

ポーター (中で) 大臣！ 大臣！

(二人は謁見の間に入る。)

大臣 そこで大声でわめいているのは何者だ？

ポーター そこで大声でわめいているのは何者だとはどういう

ことだ？ それが礼儀か？ 王室顧問会議はどこだ、毎

朝ここに集まることになっているはずだぞ？ 何だ、こ

れは、梁に蜘蛛の巣とは？ 頭の上にも蜘蛛の巣！ お

まえが大臣か？ 貴様はまるで酔の入った糞だ！……貴

様の中身を空っぽにしちまえ、バグダッド中大掃除だ、

空気の入れ替えだ、貴様らの頭の中もだ。(彼はしばし息

を継がずにはいられなくなる。)

大臣 気がいめ。鞭でたたき出してやる。

奴隸 大臣、からかってやりましょうぜ！ やつを玉座に座ら

せ、好き勝手悪態をつかせて、カリフを演じさせてやり

ましょう。

大臣 この檻樓の浮浪者をか？

奴隸 やつに黄金のマントをかけてやるんです、あなたは王室

顧問会議を招集し、この馬鹿野郎に裁かせるんです。

(前もってこの冗談を楽しむかのように、二人は忍び笑い

をする。)

ポーター おい、おい！ どういうことだ？ その忍び笑いは

何だ？ カリフには答えるに値しないというのか？

大臣 王様、一度にあまりにもいろいろお尋ねでしたので。手

続きを省いて、よろしければ王室顧問会議からまず――

ポーター おまえの隣にいる男は誰だ？ おれがたった今マン

トを取りにやらせた奴隸じゃないのか？ 哀れな男よ、

おれはおまえに、待つておるぞと言わなかったか？ (本

気で怒って、もう一方の靴を彼に投げつける。)

奴隸 こいつは左の靴です。右は俺がすでに持ってます。

大臣 まだ行かなかったのか？ わしの靴も拾い集めるつもり

か？

奴隸 急いでまいります、大臣。(立ち去りながら) 王室顧問会

議の方もすぐに招集いたします。

ポーター 生意気なやつだ。

大臣 カリフ様がいなくなつてから、紀律と秩序が緩んでしま

いました。

ポーター いなくなつた、と？

大臣 四週間のことです。

ポーター 跡形もなく、か？

大臣 跡形もなく。

ポーター で、その後は？

大臣 王室顧問会議は開かれていません。それ以来、蜘蛛の巣

が張つて——そのことにもお答えしておきますが。酔についてでは申し上げられることはあまりございません。

ポーター 結構な無秩序だ。こうなったら、これからはわしがすべてを一手に引き受けてやろう。

大臣 かしこまりました、陛下。

ポーター つまり、わしを認めるのだな？

大臣 どうして認めないことなどございましょう。あなたは生まれながらのカリフ様でございます。

(奴隷が戻ってくる。)

奴隷 飾りマントでございます。

大臣 カリフ様にお着せ申しあげろ。

奴隷 この継ぎ接ぎをまずはお脱がせしましょうか？

大臣 勝手にするがいい。

(オマールが大急ぎで身分にふさわしい身なりを整えている間に、広間には人が集まり始める。)

奴隷 さあ、お袖を、カリフ様。

ポーター この連中は何だ？

大臣 王室顧問会議です、カリフ様。王室顧問会議を招集させていただきました。あなたには判決の申し渡しをしていただくかなければなりません。

ポーター それくらいできるとも。コートをまつすぐに持っておれ、馬鹿め！

大臣 前のカリフ様の時の事件がまだいろいろと残されたまま

になつております。

ポーター 最初の事件は何だ？

大臣 三人の商人が庭番女を訴えています。すぐに前に呼び、事件を申し述べさせますか？

ポーター もちろんだ。時間をむだにしたくはない。

大臣 (大声で) ダトマ・イスバニールに対するルステム・エル・

サブールとその仲間の件。

商人 はい。

庭番女 はい。

大臣 話してみる！

商人 ご主人様、わたしども四人はこの女が番をする庭に参りました。そこでわたしどもは女に千ディナール入の財布を預けたのです——これはわたしどもの共有の財産でした。

九

(ポーターのオマールの家)

母親 いたずらをしてはいけません！

子供一 ひどい神様だ、ひどい神様だ、ひどい神様だ！

母親 アラー、このお行儀の悪い子供たちの言うことなど、どうか聞かないでください！

子供2 アラーはあたしたちの願いを聞いてくれなかったわ、耳が聞こえないのよ。

子供3 それとも、悪いやつなんだ。悪態にしか返事をしてくれないんだもの。

母親 ご慈悲を、ご慈悲を、ご慈悲を！

子供4 彼みたいな奴を呼んじやだめだ、あんなひどい奴を！

子供5 あいつはスルトンのための神なんだ。

子供6 お腹の出た連中の召使さ。

子供1 あいつの祭壇は財布を積み上げてできてるんだ。

子供2 もしあたしたちの願があなたの心に届かないのなら、

せめてあたしたちの呪いに腹を立てることぐらい見せなさいよ。

子供3 アラー、アラー、おまえは僕らの味方をしてくれなかつたじゃないか。

子供4 僕らの嘆きを聞きな、悪い神様！

子供5 金持ちをますます太らせるやつだ。

子供6 貧しいものをもっと貧しくして。

母親 小麦粉をここにもつてきてあげないから、それにかぼちやもみんなには足りないのよ。

子供1 足りるさ、でも父さんの夢が足りないんだ。

母親 夢ですって？ 夢でお腹がいっぱいになるって言うの？

子供2 あたしたちはずっとそれで生きてきたわ、お母さん知らないの？

子供3 父さんのように夢を見られる人はいなかったな。

子供4 僕も夢を見たよ。

子供5 お兄ちゃんが？

子供6 どんな夢を見たのさ？

子供4 父さんが王様の椅子に座っている夢。三人の商人が父さんの前に跪いてるんだ、それに庭番の女も。難しい事件だったよ。

母親 大きなお魚が父さんを飲み込んだのさ、おまえたち。希望はみんな捨てなさい。もう五〇日もたつんだよ。

子供2 あたしの夢は、でも、少し違っていたわ。お父さんは船の上に立っていたの、その船はハナドに向かっていたわ。

子供3 二人のうちでどちらの夢がいいと思う？

子供2 お父さんの顔は知らない人のようだったけど、やつぱりあたしたちのお父さんだったわよ！

母親 おまえ、何ていうことを言うの？ 母さんはとても悲しいわ。

子供1 つまり、僕らの父さんは父さんじゃなかったってこと？

母親 ほら聞こえるでしょ、ひどい陰口が、それも自分の家の家畜小屋から。

子供5 父さんはいつも夢をととても大事にしていたよ。

母親 あたしは違うわ。それに夢なんて！

子供6 それで、もし彼がいま来たら？

子供1 誰が？

子供2 知らない顔をしたお父さんが。

母親 もう結構。泣き女の人たちをお願いしたのよ。

子供3 そんなの取り消せば、お母さん！ もう少し待ちな

よ！

母親 おまえたちはみんな、父さんに似てしまつて、それがあ

たしには心配だわ。

子供4 だつたら、彼が母さんに似ているとしたら？

母親 誰のこと？

子供5 夢に見た男の人が。

母親 おなべを取つてちょうだい、おまえたちに投げてやるか

ら！

十

(謁見の間)

ポーター 庭番女！

庭番女 はい、お殿様！

ポーター 四人が全員そろわなければ財布は渡さない、という

取り決めだったのだな？

庭番女 そういう取り決めでした、お殿様。

ポーター 商人ども、庭番はおまえたち四人がそろつたときに

のみ財布を返す、という取り決めだったのだな？

商人 そのとおりです、お殿様、そういう取り決めでした。

ポーター ならば、わしの判決を聞け。おまえたち、おお商人

ども、おまえたちの仲間をここに連れてまいれ！ 四人

がそろえば、庭番はおまえたちに財布を返してくれよう。

(一瞬沈黙が支配する。それからこの裁定に対する一同の者たちの賛嘆の思いが、二三の叫び声となつて聞こえる。)

太守1 ご賢明な判決だ。

太守2 実に賢明な判決だ。

太守3 この上ない賢明な判決だ。

太守1 ソロモンの再来だ。

太守2 万歳、スルタン！

太守3 万歳、カリフ！

太守1 アラーよ、我らがために彼の賢明を守りたまえ！

太守2 われわれはまたカリフを取り戻した。

太守3 彼はカリフの中で最も優れたカリフだ。

大臣 太守方々、王国の偉大なる方々、わたしの申し上げるこ

とをお聴きください！

太守1 どういうことだ、大臣？

大臣 もう冗談は十分です！ わたしどもはあのみすばらしい

乞食を玉座に据え、王のマントを着せ、裁きをさせたのも、やつを笑い飛ばすためでございます。

ポーター なんとこのことを、大臣の犬野郎！

太守1 何という言い草だ、大臣？

大臣 おわかりにならぬのか、冗談もここまでくれば行きすぎというものです。もうおしまいにしなくてはなりません。

ポーター おまえたち何を話しているのだ、太守ども？

太守1 またカリフ様がお戻りになられ、喜んでいたのでございます。

太守2 見事な判決を下されたではないか。

太守3 これ以上の判決はありえない。おまえにもあれほどの判決は思いつかなかつただろう、大臣？

大臣 しかし、太守の方々、気は確かですか？ この流れ者をあなた方はカリフになさるつもりで？

太守1 彼を玉座に据えたのはあなた自身ですぞ。

大臣 だが、冗談だったはず。

太守2 わたしは彼が気に入った、このカリフがだ。

太守3 これ以上のカリフがいるか？

大臣 太守の方々、理性というものを持たれよ！

太守1 それが欠けているのはあなたですぞ。

ポーター おまえたちはわしをカリフとして認めるのか？

太守2 お認めいたします。

太守3 お認めいたしますとも。

(叫び声が高まり喝采となる、そして大臣が自分の声を通すことができるようになるまで、長々と続く。)

大臣 (ざわめきについて、声をとどろかせ) わたしは認めません。

太守1 この反逆者を打ちめしましょうか、カリフ様？

ポーター 放っておけ！

大臣 あくまでわたしどものカリフはオマールと呼ばれ、指には威厳の印として印章指輪をはめておいでだ。

ポーター 礼を言うぞ、大臣。

大臣 わたしに礼ですと？

ポーター おまえは忠実な家臣だ、大臣。わしの手の指輪に口づけをするがよい。

大臣 指輪？ カリフの印章指輪をはめているというのか？
ポーター おまえに言わなかつたか、わしの名はオマールだ。

(事態の順調な成り行きが、ここで不意に、不快な騒音によって中断される。玉座が倒壊する。オマールはやつとこのことで身体を起こすが、腹を立てている。)

太守1 (ささやき声で) 玉座が壊れた。

太守2 (同じように) カリフが玉座から落ちた。

太守3 吉兆だ。自分で倒れれば、人から倒されることもあるまい。

ポーター 大臣！ 大臣！

大臣 殿、何卒お許しを！

ポーター カリフに虫食いの玉座を用意するのが仕来りだとい
うのか？

大臣 ご慈悲を、カリフ様、ご慈悲を！

ポーター 航海の間ずっと、ハナドからバスラに至る間に、お
まえをどのように罰すればよいか考えておった。

太守1 (ささやき声で) 彼はすでに前もって知っていたのだ。

太守2 彼はすでに将来について決定を下しているのだ。

太守3 さあ、またも賢明な裁決が下るぞ。

大臣 ご慈悲を、何卒ご慈悲を賜りたまえ！

太守1 静かに、カリフがこれから何を言われるのか聞こう。

ポーター 残念だが、何も思いつかない。

大臣 思いつかれるのはただご慈悲のみ。

ポーター 何だと？

大臣 あなたはカリフの中で最も賢明にして、ご寛容なお方。

ポーター つまり、わたしを認めるのだな？

大臣 あなたの賢明さを目の当りにして、ほかにどうすること
ができませんよう。

(満場歓呼の声に割れる)

十一

(ハナドの港)

カリフ (ひとり言) 見ろ！ 地面が積み上げられていたレンガ

でまだ赤く染まっている。わたしたちがそれを積み込んだのは、ひどい日だった！ しかもその後、災難にも、

給金が支払われる前に、わたしは渡板から水の中に落ちて

て、気がついたときはバグダッドだったとは！ 六デイ

ナールまるまる逃してしまった。その渡板だ。当然だ

な——足を滑らすのも、こんなにぬるぬるしている。た

ぶん穴のあいた容器から出たオリブオイルだ。また

よ、板を裏返しておいたほうがよさそうだな——確かに

そのほうがいい。ここにはこんなものを手にとつて見る

者などいない。

ジャファル おい、おまえ、そこで何している？

カリフ 見ればわかるだろう、板を裏返しているのだよ。

ジャファル おまえの仕事なのか？

カリフ あんたの仕事でもある、だが、あんたがやらないから、

わたしがやるのだ。また足を滑らせて水に落ちたくはな

いからね。

ジャファル こんなところに探し物などないだろ。自分に関わ

りないことに首を突っ込むんじゃない。

カリフ そんなに興奮するものじゃない、ジャファル。

ジャファル ジャファルだと？ どうして俺を知ってる？

カリフ あんたはわたしのことを知っているのか？

ジャファル 若造、見かけねえ野郎だな。

カリフ わたしはあんたを毎日見ていた。わたしはカリフのオマールだ。

ジャファル オ——マール、カリフの？

カリフ ふん。

ジャファル 彼は二ヶ月前から姿を消しているんだ。おそらく溺れ死んだんだろうぜ。

カリフ だが、水からまだ浮かび上がって来てない、だろう？

ジャファル ああ、まだ浮かんで来ちゃいねえ。

カリフ 溺れ死んだりなどしなかったからだ。

ジャファル だとしたら？

カリフ ちょっと旅行にでかけたのだ。仕事で。

ジャファル (相変わず不審そうに) ちょっと——仕事で——

カリフ こうしてわたしたちはあちらこちらに立って、おしゃべりなどして。あんたには船主が見えないのか？

ジャファル 何が、どこにだって？

カリフ 白檀材を下ろさなくちゃならない。さあ、ジャファル。

ジャファル ずいぶん真面目じゃないか。そこに持つてる台は

何だ？

カリフ すぐにわかる。

ジャファル で、肩に載っているのは？

カリフ あんたたちはこれまでに船会社と最低賃金について交渉したのか？

ジャファル 何だって？

カリフ 白檀材を下ろしたら、わたしが取りかかってやろう、いや、午後のほうがいい、昼の間はわたしはシヤムサと子供たちのところへ行く。

ジャファル ああ、何てこった！ 何ていう時間の使い方だ！
よそ者、おまえはたっただいまその船から来たんじゃないかねえのか？

カリフ たしかに、な。

ジャファル それでもう白檀だと、シヤムサだと、船会社だと、最低賃金だと？

カリフ 気になるのか？

ジャファル ああ、アラ——よ、俺はいやあな予感がするぜ、俺たちの平穩が消えちまうような。

(港に打ち寄せる波の音がまだしばらくピチャピチャとずる。)

十二

奴隷 王様はおやすみです。

大臣 カーテンをあげろ！ ああ——

奴隷 奥方たちが十二人——

大臣 彼を扇いでいる、わたしには見える。

奴隷 俺は何も申しません、大臣。

大臣 棕櫚の葉の音は聞こえない。それにしてもあの視線――

奴隸 視線のほうか棕櫚の葉よりもお音は聞こえませんか？

大臣 何も申しません、と言わなかったか？

奴隸 (沈黙)

大臣 一人一人の視線が音をかもしだすとすれば、カリフの周りはすさまじい騒音だろうな。女たちはそれほど互いに気持ちを通じ合っているように見えぬ。嫉妬というものだろ、どうだ？

奴隸 (沈黙)

大臣 もちろん嫉妬だとも。しかも、ここにいるのは三六五人のうちわずかに十二人だ。いったいどうなることやら？ とかくわたしたちはカリフを得た、いわば合法的にな、生まれでだめなら指輪によって、というわけだ。しかし、どこへ向かおうというのか？ わたしには自分の心配がある。なぜ何も言わん？

奴隸 (沈黙)

大臣 もし彼がいなくなったら、われわれはどうすればよい？ やつはそもそもここに残るつもりはあるのか？ 前のカリフよりはやつのほうがはるかにましだ。だが、残るつもりがあるのか？ やつに残るつもりがあるか、おまえにわかるか？

奴隸 (沈黙)

大臣 おい、耳に蠟栓でも詰めているのか？

奴隸 いいえ蠟栓などございませぬ、しかしあなたの命令です、大臣。

大臣 そんなことを尋ねたのではない。

奴隸 声が大きすぎます、大臣。殿はすでに眠ったまま額に皺を寄せています。奥方たちがこちらを見えています。

大臣 (小声で) いったいどうなってしまうのだ？

奴隸 カリフの夢にご注意なさい。

大臣 前のカリフが見たのは、レンガと小麦袋の夢だ。

奴隸 しかも、さらに肝心なことは、前のカリフが、大臣が好んで言われるように――

大臣 おまえにわたしの言い回しをどうこう言う権利はない。

前のカリフが、どうだというのだ？

奴隸 (沈黙)

大臣 申してみろ！ 前のカリフが――どう言うつもりだったのだ？

奴隸 よく考えた、長くて難しい文章でした、決定的なことがすべて含まれている。しかし、あなたがわたしを遮った

もので、大臣、その文章を忘れてしまいました。

大臣 泣きつ面に蜂だな！ 決定的なことはずべてその文章に含まれていた、と言うのか？ さあ思い出せ、頼むから。

前のカリフが――

奴隸 そんなのは文章などありません。

大臣 ああ、そんな文法一点張りの頑固頭など捨ててしまえ！

奴隸 声が大きすぎます、大臣。殿はもう額だけでなく、今度

は鼻もしかめておいでです。

大臣 それは比較級だったか？ 前のカリフが——思い出せ！

奴隸 すでに申し上げました、大臣——

大臣 このならず者、貴様が望んでいるのは、自分の力をわたしに感じさせることだけだろ！ わたしをこけにしやがって。たとえその文章はもうわからないとしてもだ、文章の意味ぐらひはまだ覚えているだろう。

奴隸 文の意味は文の構造にありました。

大臣 (喚く) 哀れな野郎め！

奴隸 こんどは殿が顎までもしかめていきます。

大臣 だつたら、さらに足の指までしかめればいいさ！ (落着きをとりのもどして) それにしても、健やかな寝かただ。

前のカリフの居場所さえわかれば、ご気分よくおいでかどうか、またお帰りになるのかさえわかれば。

奴隸 ご明察恐れ入りました、大臣。

大臣 どういうことだ？

奴隸 それが問題の文章です。あなたはたしかにずいぶん切り詰めて言われましたが、文法家は簡潔こそを勧めております。これは議論の分かれるところです、長い技巧的な文構造か、それとも——

大臣 アラーはおまえを怒りに任せてお作りになったのだらう。

奴隸 大臣、もう一度繰り返えさせていただきますが、もし前

のカリフの居場所さえわかれば、ご気分よくおいでかどうか、そしてお帰りになるのかどうかさえわかれば。

十三

子供2 (勢いよく駆け込んで) お母さん、お母さん！

母親 なぜそんなに興奮しているの？

子供2 あたし彼を見たわ、あの男の人を、お父さんを！

子供1 父さんを？

子供3 どこで？

母親 どうしようもない人だこと！ どこをうろついているんだらうね？

子供2 夢で見たお父さんよ。あたしたちのお父さんよ。

子供4 見知らぬ顔をした人かい？

子供2 でも、あたしたちのお父さんだつたわ。

母親 あたしがおまえたちに投げつけた鉢のことを忘れるんじゃないよ。

子供2 でも、あたし夢で見たのよ、お父さんは船でこちらに

向かっていたわ。

子供5 それで、今度は実際に父さんを見たのかい？

子供6 夢に見た人を実際に見るって、どういふことかな？

子供1 父さんはいつもとつても夢を大事にしてたよ。

母親 もうやめなさい、終わりになさい！

子供2 お父さんはこちらへ向かう途中だったわ。港通りの所を。

子供3 おまえが言いたいのはさ——？

子供4 静かに！

子供5 (不安そうに) 父さんが来たんだと思うな。

子供6 しっ！

母親 (腹立たしく) さあ、来るなら来てごらん！

(足音が聞こえる、今はポーターとなったカリフのオマールが入ってくる。)

カリフ こんなに静かなのか、ここは？ オマールの話では、

いつも小屋の中は陽気な騒ぎ声がするということだったが。

母親 オマールが？

カリフ カリフのオマールのことだよ。正確に言えば、わたし

自身のことだ。こんには、シャムサ。こんには、タ

リブ、サブール、ミルダス、ヒント、それにチャトウン。

子供たち (ひとりひとり順番に、少し不安げに) こんには。

カリフ こんには、シャムサ。

母親 出て行け！

カリフ 四ディナール今日は稼いだ。それに先週の残り分だ。

合計六ディナール。さあ、受け取ってくれ、シャムサ、

家計のために。

母親 家計だつて？ あんたがあたしたちの家計に何の関係が

あるのさ？

カリフ (鼻をくくんさせて) 豆のスープ、だろ？

子供6 お母さんは豆のスープを作るのがとても上手なんだよ。

カリフ すばらしいにおいだ。

母親 (頑固に) あたしたち七人分しかないよ。

子供2 あたしの分をあげるわ。

カリフ 誰に？

子供2 あなたに。

カリフ ありがとう。聞いたかい、シャムサ？

母親 あんたのために子供にひもじい思いをさせるわけにはいかないよ。

カリフ いつもならありがたいのだが、食欲がなくてね。

子供2 病気なの？

カリフ いいや、おまえ。

子供5 だったら、どうしたの？

カリフ 嬉しくて、食欲がどこかへ行ってしまったのさ。

母親 あたしは腹が立ってね。

子供4 だったら、もう一皿余っちゃうよ。

母親 お黙り、何てお行儀の悪い子たちなの！

子供2 何が嬉しいの、でも？

カリフ やっとおまえたちに会えたことがさ。

子供6 僕たちに？

カリフ おまえたち六人とおまえたちの母さんに。
母親 誰もそんなことを嬉しがる者などいなかったよ。

子供2 でも、この人は喜んでるわ。

子供1 でも、どうして僕らのことを知ってるのさ？

カリフ 夢で見たんだよ。

子供2 ママ聞いた、わたしたちのこと夢で見たんだって。

子供1 お父さんはいつも夢を大事にしていたよ。

母親 どう言えばいいのか、全然わからないわ。あんたがはめて
ている指輪はどうしたのさ？ 知ってるような気がする
けど。

カリフ 当然さ。これはオマールの指輪だ。そして、わしの指
輪の方は彼がはめている。ああ、話せば長くなる。いろ
んなことを話さなくてはならないだろう。だが、わたし
の理解が間違っていないければ、シャムサ、おまえはわた
しに出て行け、と言ったね。

母親 (少し宥和的に) ええ、たしかに、そう言ったけど。

子供2 ねえ、まず豆のスープを食べましょうよ？

カリフ で、おまえたちがわしを追い出すのは後にする。どう
だい、それで？

子供2 どうなの、お母さん、それでいいでしょ？

母親 もうそれで十分だわ。――

カリフ だけど？

母親 お座んなさい、見知らぬあなた！

カリフ わたしの名前はオマール。カリフのオマールと呼ばれ
ている。

母親 カリフのオマールだって！ それを聞いてまた怒りが溢
れてきたわ。

カリフ おいしい豆スープがいろんなことを和らげてくれる
さ。

母親 さあ、あんたの席がひとつ空いているわよ。

子供2 (小声で) お父さんの席よ。

母親 アラーよ、あたしどもの食事を祝福したまえ。

カリフ 祝福したまえ。

解題

ここに訳出したのは、ギュンター・アイヒの放送劇「オマー
ルとオマール」(Omar und Omar, 1957)である。この作品は別表
題「カリフの指輪」(Der Ring des Kalifen)を持つ。テキストは、
「最も美しき一〇〇一夜の話」(Die schönsten Geschichten aus 1001
Nacht)執筆中に下書きされた。アイヒのメモによれば、一九五
四年四月二六日から五月二七日に、「カリフのオマール」(Omar
der Kalif)が、また一九五七年のメモでは、「オマールとオマー
ル」への改作については三日間のみの作業が記されている。す
なわち、一九五七年四月二六日に修正、五月六日に第十二場面、
五月二六日に最終場面。

初放送は一九五七年八月二五日で、北ドイツ放送(NDR)から演出ハンス・ローゼンハウアー(Hans Rosenhauer)によって、「カリフの指輪」の表題でなされた。表題「オマールとオマール」での新制作は、一九五九年六月十四日にオーストリア放送(ORF)シュタイアーマルクトから演出ヘルベルト・シュパルケル(Herbert Spalke)によって、一九六二年二月四日に南ドイツ放送(SDR)から演出オットー・クルト(Otto Kurth)による。ウンセルドに宛てた一九六五年六月一日付けの手紙によれば、この作品は『十五の放送劇集』に選ばれながら、結局は採用されなかった。

訳者あとがき

本訳稿に用いたテキストは：

Günter Eich: *Gesammelte Werke in vier Bänden, Revidierte Ausgabe, Band III, Die Hörspiel 2*. Hrsg. von Karl Karst, Suhrkamp Verlag, S.387-417, 1991

による。なお、「解題」は上にあげた全集版第三巻、巻末の編集者による「註およびギンクンター・アイヒの放送劇および放送台本の年代別総索引」から、関係部分を訳出し、文章の一部を加筆修正した。

共同作業はまず前半を新津が、後半および解題を竹中が分担

し、それぞれの草稿を作成した。その後に草稿を交換して訳文の検討修正を行った。ただし、本訳稿についての最終的な責任は新津が負うものとする。

(二〇〇一年四月二五日)